第三十八回新日美展
実行委員長を引き受けるに当って

大石　亨

第38回展の開催にあたり、実行委員長の大役を引き受けることとなりました。身に余る光栄と責任で身の引き締まる思いです。引き受けた上は、なんとしても立派にやり遂げなくてはなりません。それには皆様の絶大なる支持と協力がなくては不可能です。この際、改めて皆様の支持と協力をお願い致します。

年に一度の本展は皆様がこの一年、制作に寄せた努力の成果を発表する最大のチャンスです。全力をふるって力作をどしどしお寄せ下さい。

又同時に、せっかく発表した上はなるべく大勢の方に見て頂かなければなりません。新日美ファンの方、皆様の知人、友人など多くの方を会場があふれるぐらいの盛況であってほしいものです。

これまでの展覧会では、ややもすると作者は作者、観客は観客と一線を画するという傾向がありましたが、これからは作者と観客が一体となって作品を前にして制作の動機、過程、出来映えについて語り合えたら、展覧会は作者にも観客にもより面白いものとなるでしょう。そのためには作者の皆様出来るだけ会場にあって観客の皆様と対話して頂きたい。そうすることで会場は一段と盛り上がり、かつ新日美ファンがふえ、自ら新日美の活動に参加して頂ける方も増えるかと思います。皆様仲よく一致団結して第38回展が盛大なる成果を上げるよう頑張りましょう。

制作サイド

札幌より出品して

前田重昭

今年で三年目の絵の出品となります。新日美展に出品しようと決めた切っ掛けは札幌市の道展に入選した事と時計台ギャラリーにて、東京都の美術館で行われる新日美展の応募要項を見た時です。札幌市の時計台ギャラリーは時計台には無く、道路一本向かい側の小路に在り、私の知る限り四十年以前からの古いビル内に在ります。

東京都美術館に搬入した時は、一人で荷降ろして搬入しましたが、道展に搬入した時は手伝ってくれる人がいるのでスムーズに搬入することが出来ました。

車はハイエースワゴン九人乗りで絵を出品したいため購入しました。座席を調整して一五〇号、一三〇号の二点額縁付きで斜めに入ります。額縁はその都度絵に合わせて彫刻し自作しています。

初めの年は太平洋フェリーで仙台に到着し東京まで長距離運転で疲れました。帰りは台風の影響で太平洋フェリーが二日間欠航したため新潟より苫小牧に帰りました。

次の年は苫小牧より新日本海フェリーで新潟に付き、関越道で群馬県前橋の親戚に寄り、私が自家栽培している野菜を届けました。東京の親戚にも届けて皆さん楽しみにしてくれています。

上野へは途中車の中で一泊します。十月近くになると朝夕の冷え込みがひどく寝袋でも寒くて目が覚めてしまいます。出品後は、京都、奈良の寺院を旅行し楽しんでから新潟より新日本海フェリーで帰っていきます。初めての場所しかも夜でも運転できるのはカーナビゲーションによるもので、今では使用に慣れたので大変助かっています。

フェリーは十七時間五〇分もかかり一泊しますが、船上から遠くの海岸や海を眺めていると昔のこと、人生の思い出、絵のインスピレーションなど思い浮かぶことが豊富にあり退屈することなく楽しんでいます。

新日美展に絵を出品することにより色々な体験を得、創造力が生まれ人生を楽しむことができるので幸福に思います。今後もできる限り出品をつづけ絵の仲間にも出品を働きかけていきたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

週末陶芸の継続

陶芸　西本　英高

「趣味は何ですか？」と聞かれ、「陶芸です」と即座に答える。「良い趣味ですね」と快い響きが返ってきて、満更でもない気分だ。此処までは良いのだが、その次に「どの様な作品を作っているのですか？」と続けられると、返答に詰まってしまう。これは単に経験不足、未だその奥深い真髄に到達していない自分の未熟さによる当然の結果だ。しかしながらこれからの自分の人生をより豊かに彩りを加えてくれるであろうこの「陶芸」を、私流の楽しみ方も紹介しつつ、再度考えてみた。

陶芸との出会いは、約15年前に単身赴任を余儀なくされた北九州での海底トンネル工事時代である。工事により頁岩から出た限定量の粘土を信楽粘土に混ぜ、小振りの焼き締めビヤマグを作り（協力を仰ぎ）客先および関係者に記念品として完工後に渡したところ、大変喜ばれた。「良い趣味ですね」とまた言われた。製作並びに焼成は製鉄所の陶芸同好会の指導とガス窯によるところ大であった。

40代後半になり長かった単身赴任も終わりをつげ、東京に戻る時が来た。ふと東京に戻って続けられる趣味はあるだろうか？と自問した。ゴルフ、釣り、カメラ撮影は単身赴任により、満喫できたのではないだろうか？

新日美展特選

一方、陶芸と言えば年寄りくさい趣味と思われがちだが、粘土との格闘は筋力保持に繋がり、整形時の繊細な手作業は指先の微妙な感触が重要視され「ボケ防止」にも大いに役立つと言われており、将来のことを考えると一石二鳥と判断した。その時に出会った本が「週末陶芸のすすめ（林寧彦　著）である。著者は広告代理店のサラリーマンでありながら、50歳前にして一念発起し陶芸に挑戦。単身赴任の時に余暇を陶芸に注ぎ込み、日本工芸展に入選、最終的に陶芸家になった人物である。興味深いことに、本の中で陶芸を趣味とするにあたっては、3点に尽きるとのアドバイスがあった。①陶芸教室は出来るだけ家の近くが良い。②教室の先生とは飲んで懇親（仲間を集め）出来るほうが良い。③目標（外での入選等）を持つとハリが出来る。読んだ瞬間「これだ！」と思い実行した。（本題はこれより引用させて頂いた）

通った世田谷の陶芸教室は家から10分の所にある。作品の大きさ制限も無く、生徒の製作意思にそえる様に的確なアドバイスで指導する助っ人先生が居られた。先生は同年代、しかも『飲兵衛』だ！

入室1年が経った時、先生から「展覧会に応募してみないか？」との誘いがかかった。その教室からは、既に4名が応募し入選しており、5人目を目指すことになった。入選すれば、東京都美術館に1週間展示して貰える。その為には、入選する為また都美術館内に陳列されても迫力のある60㎝以上の大物を作る必要があった。

30㎝迄の作品と違い、収縮を考えた70㎝もの大壺作りとなると、作陶・乾燥・素焼きに手間と技がより必要であった。

更には、釉薬を掛けるだけでは面白みがないと独りよがりに判断、図柄を削りだす掻き落し技法を試したからたまったものではない、締め切りに間に合わす為に、素焼後の作品を家に持ち帰り、夜な夜な作業を続けた次第である。其の甲斐があってか、新日美の公募展に初年度より入選させて頂けた。それ以来、新日美に向け年1回の大物作品の製作が慣例となった。応募した作品例（大きさが判るように愛犬を壺の中に入れた）を示す。

週末陶芸であるはずの趣味が高じて、年1回の新日美展への入選を目指し、夜を徹しての作業を余儀なくされている現状を考えると本末転倒の様な気がするが、それでも「陶芸を趣味として良かった」と後悔なく胸を張って言える。良い点は、週末土あるいは日曜日の3時間は会社・家庭を忘れ作陶に没頭できること。次の入選を目指し、作品のアイデア・技法を考えることで、先人達が作り出した陶芸を研究せざるを得ないこと。問題点はと言うと、大物作品が出来れば出来るだけ数も多くなり、自宅の手狭なマンションでは収納しきれなくなってきたこと。書いている傍で女房が「観音菩薩の様な慈悲深い妻でよかった！と書き加えなさい。」とうるさい。

しかし特筆すべきは、陶芸教室の仲間との杯を重ねる祝勝会だ。その酒は格別であり、まさに『人生の醍醐味』だ。会社人間の社外での人間交流のなさが取り上げられる昨今、私は恵まれている。陶芸教室のメンバーだけでなく、新日美展への参加に賛同し入選した知人も増えた。またこの新たな友人と一杯飲む酒も格別である。